慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヒロシマを歩く : 慶應義塾大学被爆者調査再訪
Sub Title	Revisiting Keio University Hibakusha Survey
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.237- 258
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0237

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒロシマを歩く

――慶應義塾大学被爆者調査再訪――*

浜　日　出　夫

一　ヒロシマという現象
二　地図を描く――RE／MAP北九州再地図化計画――
三　慶應義塾大学被爆者調査
四　ヒロシマを歩く

一　ヒロシマという現象

数年来、調査のために広島を訪れている。現在、博物館の戦争展示と戦争の記憶の関わりにかんする調査を行なっており、その一貫である。いうまでもなく、広島と長崎に対する原子爆弾の投下は、ホロコーストとともに、「戦争の世紀」としての二〇世紀を象徴する出来事であり、今日の戦争の記憶においても中心的な位置を占めている。(1)

だが、広島に行けば行くほど、ヒロシマという現象はますますとらえにくくなっていくように感じられる。

ここでは「ヒロシマ」という言葉は、一九四五年八月六日の広島への原爆投下に関わる現象の総称として用いる。したがって、それには、原爆開発計画（マンハッタン計画）、原爆投下の決定に関わる政治的・外交的・軍事的な諸条件、B29エノラ・ゲイ号による原爆の投下、それが地上にもたらした巨大な被害――川合らによれば、原爆被害の特徴は、「(i)熱線、爆風、放射能による身体的障害、(ii)大量無差別殺傷による家族解体、(iii)都市破壊による家屋、財産、職場の喪失、(iv)地域社会の解体、(v)心理的衝撃、不安、緊張等」が「ほぼ同時的に急激に大規模に」（川合・原田・田中［一九六九a］、五二頁）もたらされたところにある――、長期におよぶ身体的および社会的後遺症、生活再建と復興の困難な道のり、原爆投下後の東西冷戦と核兵器開発競争、反核運動、原爆被害が生み出した無数の文学作品・映画・絵画・マンガ・体験記・証言、今日でも八月六日前後に開催される数多くの慰霊行事、それに関するメディアによる報道などが含まれる。したがって、ヒロシマという現象は、一九四五年八月六日午前八時一五分という、ある特定の一時点に起こって、時間とともに流れ去ってしまったものではなく、原爆投下にいたる諸事情の連鎖、そして原爆投下がもたらした、今日にまで続く出来事の連鎖の全体を含むものである。また、ヒロシマという現象は広島という地理的な空間のなかで完結し、そのなかに閉じ込められているものではない。それはむしろ核拡散を通して、またメディアを通して、今日では全地球を覆っているのである。長崎への原爆投下も、ここで用いている意味ではヒロシマという現象の一部としてとらえられる。

広島に行けば行くほど、集まる史資料の量は増えていくが、ヒロシマを書くことはますます困難になっていくように思われる。

それは、ひとつには、ヒロシマという現象の巨大さによるものである。一九四二年のマンハッタン計画の開始から現在にいたるまでの約六〇年間の出来事の連鎖、その広がりは、それだけですでに厖大である。さらに、こ

れらの出来事は単に次々に生起しては流れ去っていくだけではない。それらは空間のなかに、また記憶のなかに、降り積もり、積み重なっていくのである。たとえば、広島市とその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑や平和祈念碑が、学校単位・職域単位・地区単位などで建立されたものを含め、四〇〇近くあり、しかもそれらは近年も増えつづけている（西尾［二〇〇〇］）。そして、八月六日の原爆忌前後には、これらの慰霊碑の前で、慰霊祭や追悼式典が開かれ、また多くの人々が手を合わせる。だが、ヒロシマを振り返り想起するのは被爆者や遺族たちだけではない。直接には原爆を経験しなかった人々、さらには戦後生れの人々もまた広島を訪れ、ヒロシマを想起する。たとえば、一九九九年度に修学旅行で広島を訪れた小学生・中学生・高校生は約三五万人であり、広島平和記念資料館や原爆ドーム、原爆の子の像を訪れ、また被爆者（語り部）の話に耳を傾けた（中国新聞ホームページ）。さらに直接広島を訪れる人々ばかりでなく、無限に複製されるキノコ雲や被爆者の映像や写真を通して、広島を訪れたことのない人々によってもヒロシマは想起され、そのような想起のなかでヒロシマは無限に増殖しつづけている。このように流れ去り、また降り積もるヒロシマという現象は、有限な能力と時間しか与えられていないどの研究者にとっても、もはやその全体を把握することは不可能なほど無辺際なものである。

だが、これだけであれば、研究者がそれぞれの問題意識にしたがって取捨選択を行なえばすむことかもしれない。ヒロシマという現象の全体をその複雑さのままにまるごと捉えることなどいずれにせよできないのであるから、研究者はそれぞれの視点に立ってヒロシマという現象を縮減して、いわばその縮図を呈示するしかないのである。だが、困難は、ヒロシマという現象を観察し、縮図を作るための外部の視点というものがそもそも存在しないところにある。

それは、第一には、はじめに述べたように、戦後の核兵器開発競争を通して、ヒロシマという現象がもはや全地球を覆ってしまっているからである。冷戦の終結とともに、かつてほど切実に感じられることはないとしても、

いぜんとして全人類を何回も滅亡させることのできる核兵器が存在しているという事実に変わりはなく、この意味で、ヒロシマという現象の外部に立つことのできる人間はひとりもいないのである。

だが、ヒロシマという現象は外側からわれわれを包み込んでいるだけではない。それは身体化されてわれわれの内側にも存在している。たとえば、一九九六年にアメリカ・ワシントンＤＣにある国立航空宇宙博物館で開催されていたエノラ・ゲイ展を見学したときの筆者自身の経験である（浜［二〇〇二］）。以下は、そのときの見学記録からの引用である。

「筆者ははじめは特別な感情もなしに展示の記録を取っていた。だが、誇らしげにエノラ・ゲイを見上げる退役軍人らしい男たちや、エノラ・ゲイの前で笑いながら記念写真を撮っていく家族連れや、“It was necessary.”（おそらくは『原爆投下は必要だった』の意）とひとりごとを言いながら箱にコメントを入れていく老人を見ているうちに、しだいに不機嫌になってきた。それが『怒り』であることに気がついて、自分でも驚いた。筆者は戦後の生まれであるし、筆者の親戚や知り合いに広島や長崎で被爆した人はいない。原爆に個人的には恨みはないはずであった。だが、その怒りは、明らかに原爆を落とした『アメリカ人』に対する『日本人』の怒りであった。記念碑としてのエノラ・ゲイは、年齢も性別もエスニシティも階級も異なる多様な人々を『アメリカ人』にしただけでなく、同時に筆者を『日本人』にしていた。」

ヒロシマは、筆者のように直接には原爆を経験していない人間のなかにも、たとえば怒りという感情として身体化されているのである。筆者はふだんそのようなことをまったく意識したことはないし、そのような感情が自分のなかに潜んでいたことに気がついて、自分でもとまどい驚いたのである。

このようにわれわれを外側から包み込んでいるだけでなく、われわれを内側からもとらえている、このヒロシマという巨大な現象を、その内部から、いかにして縮減して記述することができるのであろうか。

二　地図を描く――RE／MAP北九州再地図化計画――

そのてがかりとして、地図を描くことをコンセプトとしたひとつのプロジェクトを取り上げてみよう。それは、二〇〇一年九月に北九州市小倉のギャラリーSOAPで開催された「RE／MAP北九州再地図化計画」というプロジェクトである（毛利［二〇〇二］）。

それは、参加者がそれぞれ小倉駅周辺の地図を描き、そうして描かれた地図を集めるというプロジェクトであった。地図を描くと言っても、ふつう「地図」という言葉で思い浮かべるような、二次元の、紙の上に描かれた地図ではない。そのような地図は、空間の内部にはじっさいには存在しない超越的な視点から描かれたものであり、空間の内部にいるどの人間によっても現実には経験されることのないものである。これに対して、このプロジェクトで言う「地図」とは、街を歩く、自動車や自転車で移動する、まわりの風景を見る、さまざまな匂いをかぐ、飲食をするといった身体的な活動を通して、空間をその内部から再編成する営みのことである。企画者のひとりである毛利嘉孝によれば、「『歩くこと』は既存の地図に沿ってなにかを再体験することではない。それは、むしろ新しく地図を作り出す行為である。より正確には、『歩くこと』は身体のなかに空間的な配列を書き込んでいくことなのだ」（同、一七五頁）。この「地図」のコンセプトにしたがって、参加者たちはめいめいビデオ・カメラやデジタル・カメラ、MDレコーダーを持って小倉駅周辺を歩き、歩きながら自分たちが見たり聴いたりしたものを記録していった。そして、その記録がそのままギャラリーに展示されていったのである。それは、毛利が述べるように、「ギャラリーの外部で起こっているできごとをできるだけそのままギャラリーの内部に取り込んでいく……外側と内側を裏返す」（同、一七八頁）試みであった。

そして、参加者たちが歩いた小倉という空間はまた、時間が降り積もり積み重なった空間でもある。毛利は小倉の真ん中を走るモノレールについて次のように書いている。

「かつて地下鉄とモノレールとどちらが都市交通の主流になるかという議論があったことを思いださせる。小倉はモノレールを選択した。今では都市のなかに走るモノレールの存在自体がノスタルジーを喚起する。」（同、一七六頁）

また「小倉駅前には、まだ新しい外観のそごうのビルが空きビルのまま残っている」（同）という。そして、空間に刻まれたこのような歴史の痕跡もまた参加者によって記録されて、ギャラリーの内部に取り込まれていったであろう。そして、そのなかには戦争の痕跡もまた含まれていたはずである。小倉はまた陸軍造兵廠が置かれた重要な軍都であったのである。小倉が二発目の原爆の第一目標であったことはよく知られている。煙で曇っていて上空から目視できなかったために、B29ボックスカー号は第二目標の長崎に向かい、結局、二発目の原爆は長崎に投下されたのである。小倉に原爆の痕跡はない。だが、ある意味では、原爆の痕跡を残していない小倉の空間全体が、投下されなかった二発目の原爆の痕跡であると言える。この意味では、小倉もまたヒロシマの一部なのであり、小倉の空間を、自らの身体を媒体として、その内部から再編成するこのプロジェクトは、ヒロシマを書く試みのひとつであったとみなすことができる。

このプロジェクトをヒントとして、二〇〇三年八月六日をはさんで広島にでかけた。八月六日の原爆忌は広島がヒロシマに姿を変えるときである。原爆忌のヒロシマを歩いてみたいと思ったのである。原爆忌にでかけるのは一九九九年以来、二度目であった。

街を歩くのには地図が必要である。「RE／MAP北九州再地図化計画」の参加者たちもまた地図を手にして小倉の街を歩いたのである。今回、ヒロシマを歩くために筆者が用いた〈地図〉は、一九六四年から六八年にか

けて、慶應義塾大学の米山桂三、川合隆男らを中心にして行なわれた被爆者調査である。(2)

三　慶應義塾大学被爆者調査

この調査は「被爆地広島にみる社会変動」をテーマとして行なわれ、「原爆投下がもたらした個人・家族・地域社会のディスオーガニゼーションが、再び曲りなりにも均衡を恢復するに至る変動の過程を出来うる限り綿密にあとづけること」（米山［一九六四］、六一頁）を目的としていた。

一九四二年に四一九、一八二人であった広島市の人口は、原爆投下により、一九四五年一一月にはいったん一三六、五一八人にまで減少したが、一九六四年には五〇八、〇二五人となり、すでに戦前を上回る水準まで回復していた（米山・川合［一九六五a］、三三頁）。一九六〇年の人口で比較すると、広島は、東京、大阪、名古屋、横浜、京都、神戸、福岡、川崎、札幌に次いで第一〇位であり、すでに中国地方の中心都市として復興を遂げていたことがわかる（同、一二頁）。そのなかで、一九五〇年には三四・三%であった広島市の人口に占める被爆者の割合（被爆者率）は、一九六四年には一八・五%にまで低下しており（同、三五頁）、人口だけからみる限り、広島はしだいに「被爆者の街」という性格を薄れさせつつあった。

そのような時期において、この調査は、被爆から四半世紀にわたる被爆者たちの軌跡を「人々の社会生活の解体と再組織化」（米山・川合・原田［一九六八］、二四頁）の過程としてとらえ、「［原爆がもたらした］被害、解体的状況、打撃、衝撃の中から人々はどのようにして立直っていくのであろうか、果して立直ることができたのであろうか」（同）という問題をあらためて問おうとするものであった。

予備調査をふまえ、一九六六年から六七年にかけて、広島市内のK地区、F地区の二地区において、サンプリ

ングによって抽出された世帯を対象とする調査が実施された。この調査は、川合隆男がK地区を、原田勝弘がF地区を、それぞれ担当して行なわれた。調査方法は世帯ごとに面接して聴き取りをするという方法が採られ、面接では、「世帯主の生活史を中心に被爆前、被爆時、被爆後の時系列に焦点を据えて、被爆体験、家族の変化、居住地、住宅、職業、収入、親族、地区生活、社会意識等」（同、三一頁）について聴き取りが行なわれた。この調査の結果は、米山・川合・原田［一九六八］、川合・原田・田中［一九六九a］、川合・原田・田中［一九六九b］などにまとめられている。

この調査において注目すべき点は、第一に、「原爆被災の社会的影響［を］……現在時点での実態調査にとどまらずに原爆被災の特殊性、被害程度と健康などの身体的条件と結びつけて被爆前後から今日に至る生活史に位置づけて考察」（川合・原田・田中［一九六九a］、五〇頁）したところにある。すなわち、この調査は、流れ去る時間の一時点における被爆者たちの生活の実態をとらえようとしただけでなく、「被爆前、被爆時、被爆後の時系列に焦点を据えて」被爆者たちの生活史を聴き取ることによって、被爆者たちの降り積もった時間の厚みにおいて、被爆という現実をとらえようとしたのである。そして、その結果、「原爆被災のもたらした身体的障害、被爆死亡欠損、心理的衝撃・緊張、社会的諸関係の崩壊、物的被害が相互に加重されて極めて甚大な影響がもたらされ、殆どの世帯は一転して生活構造を破壊（解体・準解体）された。しかも現在に至る生活変動過程でなおも後遺症的性格によって再構造化し得ていない解体型、再解体型、構造緊張型の世帯はかなりの数に及んでいる」（川合・原田・田中［一九六九b］、五七頁）という結論が導き出された。これは、厚生省が、一九六五年に実施した「昭和四〇年原子爆弾被爆者実態調査」にもとづいて、「所得、就業状況、従業上の地位、転職の状況等の諸点において、被ばく者と他の国民一般との間に有意の差と認められるものもあったが、全般的にいちじるしい格差があるという資料はえられなかった」と結論づけたことと鋭く対立するものであった（原田［二〇〇一］）。

さらに重要と思われる点は、この調査が被爆者のなかにみられる差異に注目していたことである。原爆の爆発から生じた熱線と放射線、爆風、火災は、性別・年齢・職業・階層・民族・国籍にかかわりなく、爆心からの物理的距離にしたがって同心円状に人々に襲いかかり被害をおよぼした。その意味では、原爆の物理的な破壊力は「平等」であった。だが、被爆直後から被爆者たちの軌跡は多様に分岐していく。しかも、単に実存的な意味でひとりひとり異なっていたというだけではなく、所属する集団や階層などによって規定されつつ分岐していくのである。その意味で、原爆の物理的な破壊力がもたらした社会的な後遺症はけっして「平等」ではないのである。この調査はK地区とF地区の比較を通してこの差異を浮き彫りにしている。

K地区は、「爆心より約一キロから一・五キロメートルの圏内」（川合・原田・田中［一九六九a］、五七頁）にあり、被爆以前には「全体として中層あるいは中の下層の比較的閑静な住宅地区」（同、六二頁）であった。K地区の位置する地域では、「家屋被害が全壊約六〇～七〇％、半壊約三〇～四〇％に及び原爆投下後数分から十数分後に発火炎上延焼し同日四時頃迄一円燃え続けた。また人的被害は住民の約六〇～七五％が即死者、残りの二五～四〇％が負傷者となった」（同、五七頁）。一九六五年の時点で、この地域の被爆者率は一八・二％であり、広島市のほぼ平均的な数値であった（同、六三頁）。

もうひとつの調査対象地区であるF地区は「中国地方有数の未解放部落」（川合・原田・田中［一九六九b］、二七頁）のなかに位置した。F地区を含むこの地域は「爆心地より約一・五キロ以上二・五キロにまたがっており、その九割は被爆によって破壊および焼失地域と化した」（同、三四頁）。また人的被害は、別の書物によれば、地域全体で住民の約一〇％が死亡したとされる（田阪編［二〇〇〇］、一二一頁）。爆心から一・五キロメートル以内に位置していたK地区に比べれば、被害の程度は多少ゆるやかであったと言える。だが、一九六五年においても、この地域の被爆者率は三四・五％（被爆世帯率では約六割）と、他の地域と比べていちじるしく高く（川合・原

表 1　K 地区における階層分布の変化

		被爆前	1966年
上　層	上		
	中		
	下	5	5
中　層	上	5	5
	中	10	6
	下	12	14
下　層	上	4	7
	中	6	3
	下		2
計		42	42

川合・原田・田中［一九六九ａ］80頁より作成

表 2　F 地区における階層分布の変化

		被爆前	1966年
上　層	上		
	中		
	下	2	1
中　層	上	5	3
	中	1	1
	下	6	8
下　層	上	13	8
	中	8	12
	下	4	6
計		39	39

川合・原田・田中［一九六九ｂ］43頁より作成

田・田中［一九六九ｂ］、三〇頁）、いぜん「被爆者の街」としての性格を色濃く残していた。(3)

かろうじて生き残った被爆者たちの生の軌跡がはやくも被爆当日の夜において両地区で大きく異なっていたことをこの調査は明らかにしている。K地区の調査対象世帯四二世帯のうち、被爆前もK地区に居住していたのは一一世帯であるが、「[被爆の]当夜K地区に戻った事例は全くない」（米山・川合・原田［一九六八］、四八頁）のに対して、F地区の調査対象世帯三九世帯のうち、被爆直前の時点でF地区を含む地域に居住していたのは二六世帯一四八人であったが、そのうち被爆当夜に自宅（跡）に戻った者が一六人、地域内の堤防や空地などで野宿した者が六七人あった。これは「当地域居住者の多くが市外地域、とりわけ市域を囲む郡部に頼りとなる有力な親族を有していなかった」という「当地域の同和部落としての社会的性格」（同、七五頁）によるものであった。

そして、四半世紀を経て、この被爆当夜の避難先の差異がさらに拡大し固定化していったことを、この調査は示している。この調査は、両地区における被爆後の社会生活の変化を、居住地の移動、職業と社会階層の変化、家族構成の変化、生活構造の変化などにわたって詳細に分析しているが、ここでは社会階層の変化についてのみ

簡単にみておこう。

表1と**表2**はそれぞれK地区とF地区における社会階層の分布を被爆前と調査時点とで示したものである。この表からは、両地区とも、四半世紀を経てなお、被爆前の階層水準に復帰していないことがわかるが、とくにF地区では、「下層における沈下傾向が著しく、被爆前のピークが『下層の上』にあったものが四一年現在では『下層の中』におちこんでいる」（川合・原田・田中［一九六九b］、四三頁）。F地区を含む地域の世帯主職業の第一位が失対事業労務者、第二位が被用工員、第三位無職・失業であること（同、二八頁）、またこの地域の生活保護受給率が、広島市全体の二・〇％に対して、一六・一％といちじるしく高いこと（同、三〇頁）は、この地域における生活再建がとりわけ困難なものであったことを具体的に表わしている。

このF地区の事例は、原爆は階層にかかわりなく無差別に被害をもたらしたにもかかわらず、その後の生活再建は階層によって強く規定されていることをはっきりと物語っている。この点で、この調査は、「被爆は社会階層の上層から下層にわたって、普通爆弾による場合に比較すればより一様な被害をあたえたようであるが、その回復はやはり上層において著しく、下層はより重い負担をになわされている」（中鉢［一九六八］、二八頁）という中鉢の仮説を具体的に裏付けるものであった。

原爆は、人々の属性を考慮することなく、物理法則にしたがって、人々に被害をおよぼした。この物理的な影響の意味では、被害の程度はさまざまであったとしても、「被爆者」というカテゴリーは単一であると言える。だが、この被害から立ち直る過程では、人々が属している集団や階層にしたがって、被爆という経験は多様であり、社会的な影響の点からみると「被爆者」というカテゴリーはけっして単一ではないのである。このことをこの調査は明確に示している。さらにじっさいには予備調査が行なわれたのみであったが、この調査では被爆朝鮮人を対象とする調査も計画されていたのである（川合・原田・田中［一九六九b］、五一―五五頁）。

一連の研究は、「『広島』や『長崎』の事実を単に一回的な出来事としてわれわれの記憶や歴史から葬り去り得るものではない」（同、五八頁）という言葉で結ばれている。この研究を〈地図〉として用いて、この研究からさらに三〇年以上の時間が降り積もり積み重なった原爆忌前後の広島＝ヒロシマを歩いた。

四　ヒロシマを歩く

現在の広島市の人口は約一一三万人である（全国第一〇位）。一九八〇年には政令指定都市となり、中国地方第一の大都市として発展を遂げている。その一方で被爆者の数は毎年減りつづけ、二〇〇二年三月の時点で人口に占める被爆者の割合は約七・七％にまで低下している（広島市ホームページ）。原爆ドームと平和記念公園周辺を除けば、もはや市内には原爆被害の痕跡もほとんどみられなくなっている。

八月五日朝、平和記念公園内にある韓国人原爆犠牲者慰霊碑の前で催された韓国人原爆犠牲者慰霊祭を参加観察した。

原爆による被害を受けたのは日本人だけではなかった。慶應義塾大学による被爆者調査が朝鮮人被爆者の調査を計画していたように、原爆被害者のなかには、被爆当時は「日本国民」であった多くの朝鮮人が含まれていた。[4] 日本の植民地政策によって生活基盤を奪われたために日本に移住したり、一九三九年以降国民動員計画によって強制的に動員されたりした朝鮮人が、四四年末時点で日本全体で約一九三万人いたとされる（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編［一九七九］、三五〇頁）。このうち広島県に居住していたのは約八万人である（同）。広島市内の居住者数は不明であり、したがって朝鮮人被爆者数・死亡者数も不明である。韓国人原爆犠牲者慰霊碑は「貳萬餘靈」を祀っている。広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編［一九七九］は、被爆者数二五、〇〇〇

〜二八、〇〇〇人、被爆直後の死亡者数五、〇〇〇〜八、〇〇〇人と推定している（同、三五七頁）。いずれにせよ約一四万人とされる四五年末までの死亡者のうち約五％から約一五％を朝鮮人が占めていたと考えられるのである。そして、生き残った約二万人の被爆者のうち、約一万五千人は戦後帰国し、約五千人が日本に残留したとされる（同、三五一頁）。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、一九七〇年に在日本大韓民国居留民団広島県本部によって建てられたものである。水田による解説を借りれば、「碑の高さはおよそ五メートル、カメ（亀）を形どった大きな台座の上に碑柱が立ち、頂部に双竜の図柄を刻んだ冠が載せてある。『死者の霊はカメの背に乗って天に昇る』という故事に倣ったという。碑石は韓国の山野から運ばれたもの。カメと冠は韓国の銘石である慶州石、碑柱は忠清南道の熊川石である」（水田［一九九三］、六五頁）。碑の横にある「慰霊碑の由来」には次のように書かれている。

「第二次世界大戦の終り頃　広島には約十万人の韓国人が　軍人、軍属、徴用工、動員学徒、一般市民として在住していた。一九四五年八月六日原爆投下により、二万余名の韓国人が一瞬にしてその尊い人命を奪われた。広島市民二〇万犠牲者の一割に及ぶ韓国人死没者は決して黙過できる数字ではない。爆死した　これら犠牲者は誰からも供養を受けることなく、その魂は永くさまよい続けていたが、一九七〇年四月一〇日　在日本大韓民国居留民団広島県本部によって悲惨を強いられた同胞の霊を安らげ　原爆の惨事を二度と　くり返えさないことを希求しつつ平和の地、広島の一隅にこの碑が建立された。望郷の念にかられつつ異国の地で爆死した霊を慰さめることはもとより　今もなお理解されていない韓国人被爆者の現状に対しての関心を喚起し一日も早い良識ある支援が実現されることを念じる。韓国人犠牲者慰霊祭は毎年八月五日にこの場所で挙行されている。」［洋数字を漢数字に変えた・筆者］

この慰霊碑は、原爆の犠牲となって死ななければならなかったばかりではなく、「日本国民」として死ななければならなかった朝鮮人の犠牲者たちの国籍を死後に回復する目的で建てられたものであったと言える。それは

また同時に、原爆の後遺症に苦しまねばならなかっただけではなく、民族的な差別にも苦しまねばならなかった朝鮮人被爆者たちの存在証明のために建てられたものでもあった。この碑はもともと平和記念公園から本川を隔てた対岸に建てられていた。これを民族的差別の象徴としてとらえ、長年にわたって平和記念公園内への移設を求めてきた在日韓国・朝鮮人による運動の結果、一九九九年にようやく公園内に移設されたばかりであった。(5)

慰霊祭は、韓国国旗に対する敬礼と韓国国歌の斉唱からなる「国民儀礼」ではじまり、新たに死亡した被爆者の名前を加えた死没者名簿の奉納のあと、約一五〇人の参加者が黙禱を捧げた。つづいて在日本大韓民国民団広島県地方本部代表、同中央本部代表、駐広島大韓民国総領事によって追悼の辞が読みあげられたあと、チマ・チョゴリを着た女性合唱団によって「原爆犠牲者慰霊歌」が歌われ、最後に参加者が献花を行ない、閉会となった。

かたわらに韓国の国花であるムクゲの花が咲く韓国人原爆犠牲者慰霊碑の前で、国旗・国歌・民族衣装など、韓国の国民的・民族的アイデンティティを象徴するさまざまな要素を配置して行なわれたこの慰霊祭は、被爆という経験を「唯一の被爆国日本」の経験として囲い込んでしまうことに抵抗する対抗的ナショナリズムを表現するものであった。(6)

翌日の原爆忌は、早朝、平和記念公園の原爆慰霊碑前に設けられた献花台に献花だけして、平和記念式典には参加せず、慶應義塾大学被爆者調査の調査地を訪ねることにした。

K地区の位置する観音地区は、平和大通りを平和記念公園から西へ約一キロ行ったところにあった。「市電通りや、それに面した商店のにぎわい、並木のある平和大通りの自動車の往来を別にして、この町の一画に一歩足を踏み入れるならごく普通の家々が並ぶ静かな住宅区である」（米山・川合・原田［一九六八］、三六―七頁）と書かれたK地区の様子は、三〇年以上を経ても大きくは変わっていないように思われた。平和大通りに面した県営アパートは高層に建て替わり、その周辺にも高層マンションが何棟も建ち並んでいたが、一歩裏に入ると、かつ

てと変わらないであろう静かな住宅地であった。

天満川河畔の緑地に、親鸞の座像を上に載せた原爆慰霊碑があった。広島市観音婦人会によって、台座部分は一九六五年に、親鸞の座像は七五年に建てられた（西尾［一九八二］、六四―五頁）。「原爆三十周年記念」と刻んだ石碑が前に建てられている。その隣には「原爆犠牲者慰霊碑」「戦争犠牲者慰霊碑」という文字が並べて刻まれている石碑が建っている。もともと観音町、観音本町一・二丁目、東観音町各町内会によって、同じ文字を刻んだ二本の木碑が一九六一年に建てられ、さらに七〇年にそれが再建されたが（西尾［一九八二］、六二頁）、五〇周年の一九九五年に新たに石碑として建て直されたもののようである。どちらの慰霊碑もきれいに清掃され、花が供えられていたが、お参りの人影はなかった。このふたつの碑と並んで、「凱旋碑」と大きく刻まれ、その下に「観音村下組兵士」一三名の名前が刻まれた碑が建っていた。「明治三十七八年歿」と書かれており、日露戦争の戦死者を祀ったものである。一八七一（明治五）年に鎮西鎮台第一分営が置かれて以来（七三年に広島鎮台、八八年に第五師団に昇格）、この都市が深く関わってきた近代日本の戦争の歴史、そして結局原爆投下で終わった歴史が、並んで建つ三つの石碑に凝縮されているようであった。

観音地区の西隣がF地区のある福島地区であった。福島地区は戦後、太田川改修工事と百メートル道路建設にともなう区画整理事業によって大きく変貌を遂げた。「地区内を通過する街路は、地区中央部を東西に走る県道（幅員八m）が唯一の幹線であり、その外は三～四m程度の狭小にして、曲折した未整備の街路であった。このような街路に囲まれて、雑然とした仮設住宅、または老朽化した住宅が密集して市街地を形成していた」（戦災復興事業誌編集研究会・広島市都市整備局都市整備部区画整理課編［一九九五］、二六七頁、洋数字を漢数字に変えた・筆者）とされる区画整理事業以前の状態は、一九七二年まで続いた区画整理事業の結果、県営住宅・市営住宅が建設されて不良住宅が一掃され、道路も整備されて、「面目を一新」（田阪編［二〇〇〇］、一九四頁）することと

なった。慶應義塾大学による調査が行なわれたのはちょうどこの事業が進行していた頃だと思われる。現在の福島地区も中高層の公営アパートが立ち並ぶ、周囲と一体化した整然とした町並みとなっている。

平和大通りの緑地帯に福島地区原爆犠牲者慰霊之碑は建っていた。「天を抱くがごとく　両手をさしのべし死体のなかに　まだ生きるあり」という詩が刻まれている。これは一九七六年に福島地区被爆者の会によって建てられたものである。(7) 福島地区被爆者の会によって発行された手記集『壁』第七集（一九七四年発行）に、以下のような「福島地区原爆犠牲者慰霊碑建立趣意書」が載せられている。

「昭和二十年八月六日、福島地区の即死者六百人、その後、たおれた人を合わせると、犠牲者は三千余人にのぼります。家屋のほとんどは爆風に押しつぶされ、その九割は灰尽に帰してしまいました。

行政差別によって、限られた土地に密集させられていたために、他地区よりもひどい被害を蒙りましたし、その差別のゆえに、太田川放水路の湿地帯に避難を余儀なくされ、残留放射能のなかで、不安におびえながら暮らさねばなりませんでした。こうして、差別が被害を大きくし、被害が差別をいっそう大きくしたのです。

いわれのない差別と貧困に、放射能害を加えた三重苦の生活を、強いられてきた福島地区住民は、差別を憎み、戦争を憎みます。

ここに犠牲者の霊をとむらうとともに、真の平和と解放をかちとる決意をこめて、慰霊碑を建立するものです。

昭和四十九年八月六日」

（『壁』第七集、三五頁）

そして、『壁』第九集（一九七六年発行）には「福島地区原爆犠牲者慰霊の碑建設についての報告」が載っている。すこし長くなるが、慰霊碑建設の背景をよく伝えているので、引用しておきたい。

「福島地区は、爆心から約二キロの地点で、市内西部に位置し、原爆が投下されたときは五千五百人の住民が住んでい

ました。熱線と爆風で多くの住民が押しつぶされ焼殺されました。

福島地区は、全国でも有数の都市未解放部落として著名で、食肉と製靴の町として、栄えていましたが、その半面、失業と半失業者の多い町でもありました。差別による貧困と劣悪な環境、就職や結婚の自由すらない社会的背景。或る人が、この社会的背景のしくみについて、原爆ですら変えることが出来なかったことを嘆きましたが、原爆投下は福島地区住民にとって、二重、三重の苦しみと痛みをのこしました。

被爆直後、住民の多くは地区内の湿地帯に身体を横たえ、苦しみもがきながら死んでいきました。また、田舎の学校や、農村に避難した者も、数日のうちに、残留放射能の色濃くのこっている、この湿地帯に帰らざるをえなかったのです。田舎に親籍（ママ）、縁者、友人、知人をもたない地区住民の中には、福島町民であるということで冷たくあつかわれ、泣きながら帰って来たという者もいます。

その後の生活も、市内の焼あとを、さまよい歩き、焼け残った缶詰や醤油をすくい上げ、命をつなぐという有様でした。その間にも原爆症で次々に死んでゆき、その死体を焼く煙が地区のいたるところでみられ、それは原爆で即死した六〇〇人をうわまわる一〇〇〇名をはるかに越えた数でした。生き残った者のその後の生活はどうだったかといえば、製靴産業の壊滅という中で、多くの者は、当時、ニコヨンといわれた国の失業対策事業や、重労働の土木関係の仕事で、その生活をささえる以外になかったのです。

現在、地区には二千三百人の被爆者が生きのこっています。年と共に老令化がすすみ、亡くなってゆくものが多く、直接原爆で即死したものを含め、今日では三千余の被爆者が亡くなっています。この中には、原爆で即死や行方不明になったままの親兄弟の墓を建てることを唯一の念願として、一生懸念生きてきたが、遂にその念願もむなしく亡くなってしまった者も少なくないのです。

『あの原爆にさえあわなかったら、死なずに済んだのに』、という特別な感情が、被爆者の心の中に三十一年たった今日でも鮮明にのこっています。そして、その原爆体験を通し、二度とあのような惨禍を人類のうえに繰返させてはならないという崇高な精神から、この地に慰霊碑を建立し、亡くなったものへの冥福と、恒久平和へのシンボルとしようと、

生き残された被爆者が中心となり地区住民の手によって、長い間の念願であった、福島地区原爆犠牲者の慰霊之碑が建立されました。

おわりに、詩人深川宗俊さんから、人間の生命の尊さと、無限の強さ、明るさを表わす碑文〝天を抱くがごとく、両手をさしのべし　死体の中に　まだ生きるあり〟を紹介しておきます。

慰霊碑建設委員会事務局長
福島地区被爆者の会会長
金崎　是」

（『壁』第九集、四－五頁）

午前八時からこの碑の前で催された「八・六朝の集い」を参加観察した。この集いは広島中央保健生活協同組合の主催で開催されたものである。広島中央保健生活協同組合は、一九五五年から福島地区で医療活動を行なってきた福島生協病院を運営している生活協同組合である。[8] 碑のすぐ隣にこの病院は建っていた。七時半ころから待っていたが、何の準備もされておらず、人影もなく、ほんとうに集いがあるのだろうかと思いはじめたころ、数人の若者が現われ、てきぱきと準備をはじめた。八時近くになると、みるみる人が増えはじめ、たちまち約二百人が碑の前を埋めた。多くは普段着姿の若者たちである。広島中央保健生活協同組合の青年部の若者たちが中心のようであった。青年部の代表がハンドマイクで簡単な挨拶をしたあと、上に引用した「福島地区原爆犠牲者慰霊碑建立趣意書」のコピーが配られ、被爆者の代表が廃品回収をしながら慰霊碑を建立した当時の回想を述べた。八時一五分になると黙禱が行なわれた。その時間には平和記念公園の式典でも黙禱が行なわれているはずであった。そのあと献花が行なわれ、集いは終了した。

ここにも「唯一の被爆国日本」の経験には回収されない被爆の経験がみられる。それは対抗的ナショナリズム

の形で存在しているのではなく、「唯一の被爆国日本」の経験の内部に、それに抵抗するものとして、存在している。平和記念公園から約二キロの距離を隔てて同じ時刻に行なわれた黙禱は、原爆の後遺症に苦しまなければならなかっただけではなく、差別とそれがもたらす貧困のなかで困難な生活の再建に取り組まなければならなかったこの地区の被爆者たちの経験を表わすものであった。

慶應義塾大学被爆者調査がみいだした被爆者たちのあいだの生活再建の歩みの差異は、さらに三〇年以上の時間を経て、今日、この歩みを想起する仕方の差異として存在していた。それぞれの集団がたどった歩みの差異は、この三〇年余りの間にそれぞれ異なる慰霊碑を生み出し、そして今日それらの碑の前にそれぞれ異なる想起の形を作り出しているのである。

＊本稿の執筆にあたって、資料をご教示いただき、また調査に関するお話をお聞かせいただきました川合隆男教授にお礼申し上げます。

（1）　AP通信が一九九九年に世界の報道機関七一社を対象として行なった二〇世紀の二〇大ニュースの調査では、「米軍による広島・長崎への原爆投下」が一位であった。以下、二位が「ロシア革命」、三位が「ナチス・ドイツのポーランド侵攻による第二次大戦開戦」、四位が「米国の宇宙飛行士による月面歩行」、五位が「ベルリンの壁崩壊」であった（『日本経済新聞』一九九九年一二月二一日夕刊）。

（2）　この調査と直接関連して書かれた論文を発表順に並べると次のようになる。①米山［一九六四］　②米山・川合［一九六五a］　③米山・川合［一九六五b］　④米山・川合・原田［一九六八］　⑤原田［一九六八］　⑥川合・原田・田中［一九六九a］　⑦川合・原田・田中［一九六九b］　⑧原田［一九六九］　⑨川合［一九七五］　⑩原田［一九八五］

この調査は、慶應義塾大学の中鉢正美によって、一九六六年、厚生省による調査の一環として行なわれた被爆者調査（中鉢［一九六八］）と密接に関連しているが、本稿では触れない。中鉢による被爆者調査については、原田［二〇〇一］を参照。また主要な被爆者調査をレビューしたものとして、浜谷［一九九四］、原田［二〇〇一］を参照。

(3) 調査当時のこの地域の状況については、山代編［一九六五］を参照。

(4) このほかに台湾出身の軍人・軍属、強制連行されてきた中国人、「大東亜共栄圏」から選抜されてきた東南アジアからの留学生、アメリカ人捕虜などが被爆した。詳細は、広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編［一九七九］を参照。

(5) この碑の移設をめぐる論争については、米山［二〇〇一］に詳しい。

(6) この碑は国民的・民族的アイデンティティを表現し形成するものであっただけではない。それは同時に、在日韓国・朝鮮人の間に存在する、国籍の違い、世代の違いなど、さまざまな差異を浮かび上がらせるものでもあった。この点については、米山［二〇〇一］を参照。

(7) 福島地区被爆者の会については、田阪編［二〇〇〇］を参照。この碑の建立年は、西尾［一九八二］によれば、一九七七年であるが（同、七〇頁）、福島地区被爆者の会が発行していた手記集『壁』第九集（一九七六年発行）によれば、一九七六年である。ここでは一九七六年としておく。

(8) 福島生協病院については、田阪編［二〇〇〇］、広島県生協運動史編纂委員会編［二〇〇三］を参照。

文献

川合隆男［一九七五］「原爆被災の社会的影響と生活構造」川合隆男『社会的成層の研究』世界書院、二六一―三三六頁。

川合隆男・原田勝弘・田中直樹［一九六九a］「原爆被爆者の社会生活の変化（一）」『法学研究』第四二巻第九号、四八―九二頁。

川合隆男・原田勝弘・田中直樹［一九六九b］「原爆被爆者の社会生活の変化（二・完）」『法学研究』第四二巻第一〇号、二六―五八頁。

戦災復興事業誌編集研究会・広島市都市整備局都市整備部区画整理課編　［一九九五］『戦災復興事業誌』広島市。
田阪正利編　［二〇〇〇］『部落問題と原爆の町』部落問題研究所。
中鉢正美　［一九六八］「被爆者生活の構造的特質」『三田学会雑誌』第六一巻第一二号、一―二八頁。
西尾隆昌　［一九八二］『広島のいしぶみはみつめる』私家本。
西尾隆昌　［二〇〇〇］『広島のいしぶみはみつめる　第2集』私家本。
浜日出夫　［二〇〇二］「他者の場所」『三田社会学』第七号、五―一六頁。
浜谷正晴　［一九九四］「原爆被害者問題の社会調査史」石川淳志・橋本和孝・浜谷正晴編『社会調査』ミネルヴァ書房、二七三―三一〇頁。
原田勝弘　［一九六八］「原爆被爆世帯における家族解体とその再組織化」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第八号、一―二七頁。
原田勝弘　［一九六九］「原爆被爆者の家族生活周期にみる特質」『社会福祉研究』第五号、五三―五九頁。
原田勝弘　［一九八五］「被爆者生活調査」岡本宏・中西尚道・西平重喜・原田勝弘・柳井道夫『ケース・データにみる社会・世論調査』芦書房、一九二―二一六頁。
原田勝弘　［二〇〇一］「原爆被爆者調査と生活構造研究」『明治学院論叢』第六五八号、四三―八八頁。
広島県生協運動史編纂委員会編　［二〇〇三］『広島県生協運動史』広島県生活協同組合連合会。
広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編　［一九七九］『広島・長崎の原爆災害』岩波書店。
水田九八二郎　［一九九三］『ヒロシマ・ナガサキへの旅』中公文庫。
毛利嘉孝　［二〇〇二］「RE／MAP北九州再地図化計画」『10＋1』第二六号、一七三―一八〇頁。
山代巴編　［一九六五］『この世界の片隅で』岩波新書。
米山桂三　［一九六四］「被爆地広島にみる社会変動」『法学研究』第三七巻第一二号、五七―九七頁。
米山桂三・川合隆男　［一九六五a］「原爆と社会変動（一）」『法学研究』第三八巻第九号、一―五三頁。
米山桂三・川合隆男　［一九六五b］「原爆と社会変動（二・完）」『法学研究』第三八巻第一〇号、三三―七六頁。
米山桂三・川合隆男・原田勝弘　［一九六八］「原爆被爆とその後の社会生活」『法学研究』第四一巻第三号、二三―八

八頁。
米山リサ［二〇〇一］「エスニックな記憶・コロニアルな記憶」（上）『世界』二〇〇一年一一月号、一二二―一三一頁、（下）『世界』二〇〇一年一二月号、二五九―二七三頁。
中国新聞ホームページ　http://www.chugoku-np.co.jp/
広島市ホームページ　http://www.city.hiroshima.jp/